

さんへ届くもんやろかな」

一八

「恐れ入ります。入れに遣らうと思ひました處が、鳥渡丁稚の手が閉がつて居りましたんで……」  
「何。イヤ何や云ひなはる。丁稚の手が閉がつて……丁稚て誰の事や。藤七とん、お前は  
んが丁稚と違ふか、イヤサ、縫上げ下ろして名前が替つたらそれで立派な番頭はんやと思ひなはるか  
……貴方何んぞ一人前に出来る事がおますか。旦那の代りに葬禮送るのと、御親類中へ年回の日を知  
らしに廻る他に何が出来るのや。」

「向ひのお家まで、四足半で飛で往きます」

「よふそんな阿呆らしい事を自慢しなはる。丁稚を遣ふまでも無い。何故自分がお臀を上げて入れに  
往きなはらん。體格ばかり無暗に大きなたつて、餘り御近所へも見つとも無い依てに、親旦那がまだ早  
いと仰有るのを、私が無理に頼んで縫上げを下ろして貰ふたんや。今から、を使ふ身分や無い。あ  
んまり増長しなはんな……久七とん。鳥渡此處へお來なはれ。私此間から一遍貴方に云ふことと思  
ふのや、店で本讀むのは廢きなはらんか。商人が店で本讀でる程いかん物は無いナ。それが第一商ひ  
に身の入つて無い證據や。人さんが遣入て來なはつても、本に氣が乗てる物やで、どふしても無愛想  
に成る。そんな事してる間が有るのんなら、見本の抜けたのが無いかよう調べときなはれ。……利助  
どん、貴方も此處へお來なはれ。……私が見て見ん振りをしてるちウと、久七とんに意見してる  
のを尻目でチョイ〜見て、肩でフ、ンと笑ふてなはる。不可ん事やな。可笑しい事が有るなら、大

きな聲で遠慮無しに笑ひなはれ、セ、ラ笑ひは仕なはんなや。お前は人も餘り人を笑えたお方や無いで  
此頃何を稽古してるのや……インヤ覆しなはんな、私しや能ふ知てます、淨瑠璃を遣てなはるな。  
コレちいと身分が違やへんか、あれは御大家の旦那方が資産を跡目へ譲て仕舞ふて、それから樂しみ  
に稽古をなはる物や、アタ嫌やらしい鳥渡目を放すと小さい聲でオガ〜云ふてる。見られた態かい  
な。奉公人の分際で、餘まり分に過ぎた事しなはんなや、そつちへ行てなはれ……ア、幸助どん……」  
「ソーラ來た。」

「イヤ何ぢやと云ひなはる。何がソーラ來たやいな、フーム。すると何かお前は私は私に小言云われ  
るのを待てなはつたのか。……お望みなら申しまつせ。ヘエ〜云ひまへいでかい。コレ幸助どん。  
貴方は他の人と同なし様に、仕様も無い意見をしられて宜え人と違ふ筈やおまへんか。サア是れ見な  
はれ、帳場の鍵だつせ。私に來年にでも別家をさして貰ふたら、此鍵は一體誰が預りまんのやいな  
そんな事で此鍵が預けも出來にや預かりも出來しまへんやろがナ。私にも今年四十二、本來ならとふ  
の昔に別家もさして貰ふてるのを、貴方が頼り無い依てに延ばして貰ふてるのと違いまつか。……昨夜  
何處へ往きなはつた」

「ヘエ、お店を仕舞ふてから、チョット風呂へ……」

「そら知てますわいな。……併し風呂にしては豪ふお歸りが晚かつたが……」

一九